

眞生

第二卷第七號

何の爲めの反省ぞや

□吾人の生活には反省を要す。古來の偉人先哲も皆この反省の無いものはない。而して吾人の生活にも又之を経験するのである。

□乍然何の爲めの反省ぞや、そは要するに自からよからんとする自己本心の願いに外ならぬ。

□されど人は皆如何なる場合にも只反省のみに終るべきものではない。どこまでも始終自他發展を中心としてのみ眞實の反省をなすべきである。

□さうでないとは人は完全でない爲めにともすれば自己の缺點を發見し、若は自己の力なきに絶望して再び立つべき望みさへ失ふに至るのである。

□救濟の宗教が私共に力となるのは即ち此の絶望を救ふところにある。救ひは人生の轉機である。

□されば反省とは必ずしも失敗の時のみの反省ではない、一切を如來の如くに生きやうとする人類本心の要求であつて、眞實に活動することのできる所まで行かぬばならぬ。

□かくて自己の欲する所直にこれ宇宙の本心、人類理想の生活であつて、反省の必要は眞に生る所にある。(念)

眞實の信仰

土屋觀道

茲に題して眞實の信仰といふ、世には自ら信仰なりと思ひ乍らそれが信仰でなかつたり、或は自ら眞實なりと思つてゐた信仰も後日に至つてそれが誤まりであつたと知ることのある限り、眞實の信仰が如何なるものであるかといふことを他人の信仰について考へたり、或は自から先哲の教へについて考へて見るといふことは眞實に道を求むる人に於ては必ずしも無駄なことではない。加之凡そ吾人の宗教が教へとしては完全でも其の人の境遇若は個性の相違よりして未だ充分でない時が往々あることを認むる限り各人の信仰状態に於てそれが如何なる意味と程度に於て其の信仰が眞實であるかどうかを反省し見るといふことは更らに大なる必要のものとも云ふべきである。

然らば眞實の信仰とは如何なるものであるかといふに、もとより一口にこれだと言はるべきものではないが斯くの如きものであり、又斯の如きものであらねばならぬといふ程度に於て少くとも考へられたいものではない。而して之を認識論的に云ふならば信仰とは自分が自分以外の而も自分以上の或る絶對なるものに信頼し歸依する心的一つの事實であつて、單なる知るといふ一つの事實とは全々違つたものである。所謂信ずるといふことも普通の只それが誠であるとか、又は眞理であるとか、或は痛いとか堅いとかと信ずるといふ信とも異なつたものである。故に眞實の信仰といふものは少くとも其の人自身に信

じ仰ぐところの信仰の事實であらねばならぬことは勿論である。乍然此の意味に於て今日の所謂眞實の信仰なるものを確かに有せる人が幾人あるであらうか、未だ自からに何等の信仰するところのものもなくして、只單に自分が僧侶であるとか若くは其の寺院教團に屬してゐるとかの關係よりして、自からその信者かの如く考へ、又一應其の宗、宗派の宗教教理や宗教儀式を習ひ覺えた丈で自から其の宗の信者かの如く思ひ若は僧侶かの如く思ひ誤まつた人々が甚だ多い。然し夫は決して眞實の信仰ではないのであつて、眞實の信仰そのものはどこまでも自分が如來に歸命する事實の信仰でなければならぬ。故に眞實の信仰はどこまでも自己自身の體驗によつてのみ初めて之を得ることができるのであつて、單なる學問や知識によつては之を得らるべきものではない。これ法然上人が「學生骨になりて念佛や失はんずらん」と戒められた所以であつて、學問と信仰とがどこまでも異なるところを示された所以である。乍然斯くいへばとて吾人は學問と信仰とが矛盾するものであるといふのでもなく、又學問を徒らに排斥するものでもない、要は只學問沙沙にのみ陥つて今佛そのもの即ち信仰そのものを失はんとするを戒しむるのであつて、こゝには必ずしも信じてないといふことを知るべきである。即ち其の宗の教理教儀を學校などで教はつて之を知つたといふことが必ずしも直にその信者であるとはいはれない所以であつて、知つたと云ふことが直に信仰そのものではないのである。例へば法然上人が十八の御歳から四十三歳の其歳まで二十六年の間の研究の如き始んど一切經を五度もくり返へされたにもかかはらず、の知解が必ずしも直に上人の信仰ではなかつたことを見ても知るべきである。然し乍ら今日の未學の徒弟所謂其の宗の教學に屬する人々、即ち其の宗の寺院、僧侶若は之等に屬する教團信徒にして、未だ自己の信

仰も無くして自からを何宗、何派の信者の如く云ふ人があるのはこれ最も誤つた考へであつて封建的遺風から來た弊害といへ實に概すべき限りである。之に比すれば他から見ではよし迷信といはても自から信ずる所を信奉する多くの人達は未だ信仰も無くして、自から信者かの如く思ひなせる人々に對して其の信仰の點に於て勝ること幾層といふべきである。

されば古來より宗教の祖師ともいはれる人々は決して單なる教理や儀式で満足するものではなく、何處までも自己の本心の歸命するところを求めて止まなかつた。即ち彼れ等は一切を自己の體驗にまで持ち來した人々である。

然るにその次の弟子達に至つては多くは先師の言葉を概念化し、その言葉によつて説かれたる祖師の精神と一味の靈境に立つことを忘れて、ともすれば單なる形式に墮するのである。もとよりそこには其の時代の變遷と個性の相違といふものがある限り、如何なる場合にも一切が全々師弟の間が一致すべきものでないことは勿論であるが、乍然これ等の相違として是認する所あると同時に而かも師子寸毫も相違しない所の萬古不變の一大真理が宗教信仰の上にもあることを忘れてはならない。即ちそれが普通の真理であつて此の真理こそは即ち眞實の信仰といはれる所である。然らざれば祖師の法語といふものが全々意義をなさなくなり、從て單なる一の偶象となり概念となつて、反つて人類信仰の進歩を妨げ、人類向上の進展を疎害するといふことになるのである。而して此の弊害たるや今日の僧侶並に信徒に於て最もよく示されてゐる所であるか。

然るに眞實の信仰は斯の如きの意味に於て決して單なる概念的のものではない。即ち寸毫も他律的教

權の支配を受くるものではなく、どこまでも自己自身の如來に南無する純信の歸命であつて、絶對依憑の信仰である。故にそこにはたゞ一心に如來に歸命することによつてのみ一切が許され、一切が成就せらるゝの信仰であつて、そこには永遠の生命と無限の向上が我自らに成就せらるゝの信仰である。即ち如何なる場合にも自己自身が本心よりそれに向つて信仰することのできる信仰でなくては少くとも信仰の事實とはならないものである。此の故に眞實の信仰とは先づ少くとも自己自身に於てそれを信ずるといふ一つの信仰の事實がなくてはならない。

故に之を心理學的に望むれば眞實信仰とは心理的一つの事實であつて、之を心の活動よりいへば全心生活の中心たり歸趣たる人類生活の根本原理である。即ち人類生活の根本要求が宇宙唯一の絶對に歸趣する事實であつて、そこには如來を中心として、一切は統攝せられ、又歸趣せられ神聖と正義と恩寵との中に永遠の生命と無限の向上とを獲得するのである。

又之を宗教學的に望むればそこには宗教の正態として一切の宗教の中、最も進歩し發達せるもの、即ち最善至高の完成的理想の宗教と信せらるべき信仰であつて、殊に自分の信仰を他の多くの宗教並に信仰に比較して考ふる時、最も此の感を強ふるのである。尙之を分つて云ふならば宗教の目的に於て眞實の信仰は人類生活の理想實現と矛盾せざるのみならず、更らに進んでは此の理想をして常に指導し向上せしむる所の信仰でなければならぬ。そこには人格の尊嚴があり、眞善眞善聖の靈界がある。而して、現實より永遠を離れざる社會生活の中心となり、靈と肉とを分離せず、靈肉一致の生活であつて、如何なる罪惡深重の人と雖も一切は許され、漸時向上の生活に轉向し、自由と正義と平等と博愛とを理想と

して、社會改造の積極的活動に献身的向上の生活であらねばならぬ。そこにはいつも清淨にして力と望みと善びの生活があり、疲れた人には心よりの休養となり、力ある人には常に全身の活動となる。生死の中はも生死を離れ、而かも永適の生命と向上に生く。即ち眞實の信仰は之等が充分に充實せらるゝの信仰である。若し之を宗教の本尊上より云ふならば吾人の本尊の信仰は宇宙唯一の絶對であり、諸佛の中の本佛がある。萬法の統攝にして一切の歸趣たる宇宙の太靈である。而して智慧と慈悲との圓滿であり三身一如のミオヤである。

そこには衆生と佛とは一體であり不二である。而して其の宗教の方法より之を云ふならば眞實の信仰は如來に南無することそのことが直に如來に歸一する方法であつて、最高の理想を最も容易に誰れでもが成就することのできるものでなければならぬ。それが即ち本願の念佛である。

而して、之を道德若は藝術に見るならば、眞實の信仰は又決して之等の理想と相反するものではない、否むしろ善美をつくせる理想世界であつて、斯かる信仰の生活こそ道德生活の極致であつて、人類藝術の生ける理想でなければならぬ。

加之これを哲學的に望むるも決して、矛盾するものではない、否むしろ近代哲學の傾向は宗教生活の是認であつて、決して之を否定せんとする所のものではない、否此の人生の根本要求こそ即ち哲學の歸趣すべき所であつて、哲學は宗教に一致せずは止まないものである。凡そ此の世に於て永遠の生命と無限の向上とを眞實に吾人に満たさんするものに此の宗教を外にして何處に眞實の世界があらう。

然り而して、今靜かに現代の社會要求を観察すれば、時代は正にこの信仰の生活を憧憬するの秋では

ないか。而して、人類の理想は今や單なる一國一村にのみ捕はれず、正に人類中心の理想實現にまで向つてゐる。そこには人類の自由と平等と限りなき平和の世界とが如來の慈光を中心に充實せらざるは止まないの勢いである。乍然現實の社會はあまり肉慾と財慾と名譽慾との争闘に疲れてゐる。而して、餘りに生活そのものに捕はれてゐる。而して若も此のまゝに過ぎ行くなれば現實の世界に更らに一層の肉慾と財慾と名譽慾との爲めに共斃れとはならないか。加之、其の人類の主張する思想そのものも殆んど異説百出の有様であつて一として歸趣するところを知らぬ有様であつて心なき人の頭には一々之を知るのさへ已に疲勞し切つた有様である。

乍然かゝる時代のその中に於て、靜かに人類向上の一大轉開の方向を望め來る時、そこには歴えんとして壓ゆることのできない人類の自由と正義と博愛の永遠の平和が此の土に實現すべく動いて止まないものゝあることを觀取するに難くはない。而して眞實に信仰を求むる人々の心の中にかゝる人類の要求が最も力強く含まれてゐることは言ふまでもないことである。而して、それは内に向つては自己本心の絶對的満足であり、外に向つては世界思潮の中心として人類理想の統攝となり歸趣となる理想生活の根本である。故に吾人が一度人生の意義に心傾け意を之に注ぐ時すべてはこゝに來るべき運命を有すといふも決して過言ひはないである。

乍然かくの如きの信仰は自然に放棄してそのまゝに現はれ來るものではない。そこには人類の理想と實現の要求として深く自から反省した結果である。又一面には宇宙創造の無始の始より宇宙に内在せる人類本心の要求が人類の理想を通して此の土に成就さるべく表現し來るものとも見るべきである。

されば吾人の理想即ち眞實に生きんとする吾人の要求は宇宙の本源に歸らんとする人類本心の要求であつて自から宇宙の眞善美に融合し、人格的にも宇宙の靈格に歸せざれば止まる聖なる心の要求であつて、社會の道徳人類の向上と眞實の信仰は矛盾するべきものではなく、哲學も科學も藝術も道徳も反つて相互に相助けて行くものである。否むしろ眞實究竟の信仰は之等の規範中心ともなるものである。

而して斯くの如きの信仰は正に一切の人類の信順すべきの眞理、又従つて古來幾多の聖賢が信奉し來れる所であつて、私の信仰も正に此の理想を中心として眞實に生きやうとするの信仰である。

而して之を彼の釋迦孔子キリストの生活に見るに如何に彼等が自己眞實の信仰に生きしことは、少くとも彼等は其の全力を盡して其の自ら信念に最も忠實であつたことはいつも吾人の尊敬措く能はざるところである。乍然斯の如きの彼等の大業が如何にして演ぜられたかといふにそれは全く彼等が信するところの信仰の力といはねばならぬ。即ち彼等は各々各自に天を信じ神を信じ如來を信する所があつた。而して此の天神佛こそは彼等に於ける彼等の大業を演せしめたる信仰の中心ではなかつたか、それこそ彼等が生命の、根原であり中心であるところのものといはねばならぬ。而してそこに彼等の眞實なる信仰があるのである。

而して斯の如きの信仰は必ずしも是等二聖にのみ限つたところのものではない、已に古來幾多の聖哲が等しく斯の道に立つてゐるのであつて、一宗の祖師とも云はるべき人々にして此の確信の無かつた人々ではない。而して今や覺つかながらにも之等の信仰が我等の心にと眞實の理想の光りとして輝き始めたといふことは何たる至幸のことであらうぞ。(六、十三)

如來に催されて

小幡空悦

私は今破れ家に住んで家業を勤めてゐるが、其中に人の知らない悦びを感じてゐます。

私には我物と云ふ物が無くなつた、その代り大無限の宇宙が我物になりました。實に尊く大きい、無礙自在です。私と云ふ者があつて私は無い而かも斯うやつて立派に居る、誰にも壓迫せられず自由で清淨で歡喜極りない、多くの人を此境致へ惹き入れんと手を出すと、ぐつと腕んで私の手を拂ひ除ける、そして蒼蠅いと云ふ目附をしてる私はそれを見ると堪えられぬ。

私は如來と何時も一所に居る。私がぬけて出様とするゝ慈父はちやんと一緒に來て居られる。そして夜休む時も朝起きる時も、お飯を戴く時も仕事をしてゐる間も常に如來が側についてゐて下さる。仕うかしてぬけ出やうなどとした時はグツと

掴まへられるのです。私が如來になる事は出來ぬが如來が私に成てゐて下さるのです。

私には大宇宙と私との間に眞理の白道、定規が通てゐる。私は此定規にあてて總てのものを見ます、此定規にかけるとものの正邪眞偽が判り解る。世には信仰を一の娛樂にしてゐる人がある、又信仰を喰物にしてゐる人、信仰を看板にしてゐる人、信仰を賣てゐる人、信仰を嗅ひてゐる人、信仰を手抱へにしてゐる人、信仰を喰過ぎてゐる人、信仰の型を製造してゐる人、信仰の型にはまらうとしてゐる人がある、又信仰を踏んでゐる人、信仰に感謝してゐる人もあります。數へ上げると限りが無いが萬人顔の異ふ様に各々其分に應じて留つてゐるから仕方がない、一體我々に如何なる方面に信仰を求めてゐるのか。

一本信仰は心質本位で無規定のもので、それを或規定にはめやうとする時に宗教は死ぬてゐる生きてゐるものは形を創造してゆく、生きた信仰は

自由で尊大で眞實である。

一時は白熱化した火も時を經れば冷めてゆく、永く養て來た信仰も偽信妄信であつたなら段々消えてゆく、初めは眞實の信に生きた積りでも次第に死んでゆく。本當に信仰ほど至難なものはない、此れが物質的のものであつたなら一つ二つ三つと信仰の數も數やして行けるし、一升二升三升と量つても行けるが、信仰そのものに就ては見る事は來ない、心質本位のものだから外れてゐても知らずに居る。

口には随分大信者振た方々も御座る、私は佛を見たの光明を拜んだの、何を見た彼を聞いたと騒ぎ立ててゐる。そしてこんなものが一斗も溜れば三昧發得などと考へてゐる。それを又私もそんな靈感に被りたいと夢中になつてゐる人がある。かと思ふと私には靈感が薩張り無いと非常に苦しんでゐる人もある、随分悲惨な事だ。阿彌陀様も光明會へはうんと奮發して靈感を下さつてゐる様に

思ふがまだ足らんと見える。私は先に華ばかりを並べて見てゐる教理だと眞宗を喝破したが、今此光明會も其轍を蹈んで居りはせぬか、少々變體の宗旨になりかかつて居りはせぬかと思はれる。

信仰は他人事でなく自分自身の問題です、人の信仰に左右せらるる様では信仰とは云へぬ。而し自己を殺すものは自己で、作佛度生が逆轉して自己共に殺してゐる様な時がありはせぬか。

小便と赤兒が同門から生れる様に

智愚賢鈍も

乞食も王公も

罪人も善人も

みな如來の前には同門同生だ
大事の可愛兒だ

懺悔錄 (續)

演 阿 彌

翌朝は非常の期待を以て御念佛を熱心に熱心に稱へましたが、噫、正義の上にも正義に在ましが給ふ如來様よ。私は又しても有所得の谷に逆戻りしたので御座います。今迄に幾遍も之で失敗して居るか知れないのに、何と云ふ度し難い私の心でせう。期待はスツカリ裏切られ而して私は唯だがつかりして仕舞ました。朝飯の時、上人に、
「如何した事なのでせう。元の李阿彌です。」
と訴へますと、唯だ一言

「餘り亢奮して居るからです。落着かねはいけません。」
嗚呼。然様です。私はやつぱりあせつて居ました。

「あせつてはいけない。而して期待してはいけない。無所得にあきらめてスツカリ如來に任せ切る事だ。自分には何にも力はありはせぬのだ。」
かく心が定まると此次の御念佛は何の雜作もな

く正念が續いて行くのでした。而して云ひ知れぬ喜悅を感じるのでした。U様は

「擇法さへ出來ればいい。」

と、また云つて下さいました。夫れから少し座談會があつて午後芽出度解散致しました。S市のT上人やY町のK上人や私の法兄方や色々の方々が共鳴して下さつたのも嬉しさの一つで御座います。が殊にT上人とは永い間手紙で信仰問題に就て語り合ひましたが、今度非常に共鳴を感じて下さつた事は今以て忘れる事の出來ない一つの記念で御座います。噫、如來様よ。本當に今もまだまざまざと忘れ難い永遠の記念で御座います。此様な數の嬉しさが續いて爲か、此日の座談會の時から私は私の身體に一種微妙なる感じを人知れず覺えるのであります。然様です。輕安状態とも云ひませうか、手も足もとろける様な快よさ。否な融入る様な快よさ。譬へば酔ひ心地とも云ふ可き嬉しい嬉しい快よさ。其禪悅の靈感を其翌々日迄も覺えたので御座いました。今ま生理的解折を下げば努力の後に伴ふ一種の勞れだとも云はれます

が此様な勞れなら幾日續いたとて氣持としては随分いい物だと思ひました。夫れに頭惱はスツカリ水で洗はれた様になつて智識は何も残つて居りません。丸でカラッポのやうで空虚と云ふ丈ではまだ本當に云ひ足りません位に思ひます。あゝ然様です。かつて辨榮聖人から

「入信無學位。」

と云ふ事を承つたが、正に唯今の私の事實だと感ぜざるを得ませんのです。丁度白紙の様な、一切をスツカリ置き忘れたと云つた様な精神状態で御座います。理論めいた事を絞り出さうとしましてもサツバリ出さうにもありません。生れ更つた純白な心。濁りに染まぬ白蓮華の心。我乍ら實に不思議の事です。噫、本當に今度の御別時は私に取つては實に實に思掛けない慧まれた物で御座いました。然し唯今追憶致しますと、ホンの生れ立てな今更卵から飛び出した斗りの儼然な初生兒で自分自身をハツキリ見る事も出来ない本當に本當に確ない者であつたので御座います。上人が御立ちがけの時にも、

「今度の別時は實に思ひ掛けませんでしたね。これも畢竟あなたの發願の動機が正にかつたからです。嗚呼本當に信心發得是れ即ち眞實解脱です。」と云はれましたが、私は何が何やうサツバリ判りませんでしたから、ボンヤリして顔付で

「然し私はまだ解脱して居りません。」

救はれた時が即ち解脱したのだから馬鹿なものですね。だから上人はするどく

「解脱したではないか。」

「然し私には其自覺がハツキリクして居ません。」

「自覺。さうですね。やがて夫れも出來ます。」

噫々解脱よ。煩惱よりの解放よ。一度眞實に生れ更つた時實には解脱の境に入つたのでありませう。「不斷煩惱得涅槃」とは概念でなく情意の上に現はる可き確然たる自覺境であらねばなりません。然し乍ら私は御耻かしい事です。此時分には、聲聞乘に於ける一切の煩惱も斷盡して後に證得する處の「無爲境」其物を以て解脱なりと考へて居りましたから、何處してもハツキリしなかつたので御座います。だから「生死涅槃眞實」と執する處の其

阿羅漢の悟とのみ求めて「生死涅槃假名」と知る其佛乘の無住處境が臍ろ氣にさへも判らなかつたので御座います。今更暫く眼を私達現在生活の上に注ぎます時、普通に五欲と貶して居る處の此の生理的欲望の必要を認めない譯には行きません。睡眠慾や食欲慾や呼吸慾や是等の色々の慾求を何處して私達の上から取去る事が出來ませう。此生理的必然の要求を賤しめて現實否定若しくは現實逃避を企てる中世紀的な變態思想を是認する譯には行きません。然るに今更私が現實生活を肯定し乍ら而かも一面に此反對の思想から導かれたる其解脱境を實現せんと望む事は、餘りに無反省であり而して到底私の上に現はる可き性質の物でないの御座います。此出來無い相談の物を不明にも要求して居つたので御座いますから當然開かる可き物も開題されなかつたので御座います。然し思想上にはこの様に矛盾したものを抱いて居り乍ら、一方に感情の上から直視的には矢張り現實生活其儘の中に超々然たる安忍の境界を望んで居りました事も事實で御座います。即ち煩惱の中に然も其

煩惱に束縛されない自由境が望まれて居るのでありました。之は煩惱を煩惱と見る可きでなくして菩提の爲の資糧、菩提の爲めの加行分、菩提の爲の見道種、菩提の爲の修道量たる處の、淨化されたる煩惱であり而して精神の上には眞理追求の理性が満足され、形式の上には善美要求の感性が満足される處の眞實の價値に目醒めんとする芽萌えでもありました。實に愚かなる私をして正しき道を歩ましめんとする唯だ一つの慧まれたる指針であり導者であつたので御座います。然し當時に於いては先入主に眼が暗くなつて居りました爲めに無明谷深くして聲聲緣覺の究竟地を理想として居りましたのです。法性峯高うして唯一佛乘の覺路が見えなかつたのであります。聖龍樹も嘗て

「二乘地に墮するを菩薩の死と云ふ。」

と云つて居られます。噫々。私は間違つて居つたのです。否な否な盲目であつたのです。私が私に出來得なかつた「自己改造」が如來様に依つて爲される其の黎明心狀が、日常生活の一一に當つて或は順調に或は逆調に體驗される時、順調には體現

實證の法悦を味ひ逆調には反省と希望とを善ぶ處の其當體が直に私の望む處 其解脱境、若しくは一步譲つて其解脱境への過程であつたものを、何と云ふ育目な事であつたのでせう。今ま私の中に内在せる聖的人格の開題に就ての價値が、私の上に第一義として考へられる様になつた時、最早や私の上に行はるゝ種々の煩惱は私を惱ましめ苦しましめる物でなく却て私を喜ばしめ私を奮ひ起さしめる私の唯一の味方であつたのであります。噫。常に向上を忘れず常に現在を喜び常に元氣を失はない此の自由解脱安樂喜悅の世界こそ現實生活を無視せずして然かも現實生活を超越せる處の實に近代人の新理想に適合するものであるのであります。然し先入主を持つて居る私としては寧ろ判らない方が當然であつたので御座います。生れ立ての赤坊が歩き出したら却て危険かも知れませんが。何にも判らない事がやがて正しい育ち方であつたのかも知れません。然し喜こんで下さい。私は此時單純に「自己改造の目醒め」に夜の明けた事が嬉しくて嬉しくて堪らなかつたのであります。

噫。然し此「自己改造の目醒め」こそは私の信仰史に特筆す可き入信第一期の自覺であります。而して頑固なる内凡が覺醒した處の一大事實であります。而して又猶更に大なる喜びは私の御念佛が難念餘念に邪魔されずに南無の一念が繼續されると云ふ一大奇蹟が恵れた事であります。此喜びは凡ての感情を制伏して唯だ此の一事への感激を高鳴りさせて居りました。二三日の後、法類方も歸り色々の残務が片付いて了つてからも此法悦は取り去る事が出来ませんでした。約十日斗りと云ふものは丸で天上界の人の様に慈情と名付く可きものは影を隠しそして不思議と云へば云はれぬ事もない二三の現象も起りました。處が或日或動機から再び煩惱を意識し而して事實に自らの墮落を感じ初めました時、稱名實感も段々に拙い物に成つて行くのであります。然し一方に於ては、自己改造に就ての反省が強く強く思はれ出しました。如何して改造し行つたらよいのでせうか。何處な方法を講じたなら早くよくなり行くであらうか。さつぱり判りませんでした。私の日常生活の上には幾多の改造すべき問題が生じて來ました。(續く)

宗教教育の布及を教育者に望む

松浦重三

私は先日名古屋新聞紙上に於て日本の世界より排斥せらるゝ理由と題する、志賀重昂さんの講演の筆記を拜讀致しました。其内容は我日本人の欠點とも云ふべき道徳觀念の低級なる事、公共心の乏しき事、自然物保護觀念の欠けたる事でありましたが、根本問題たる欠陥を如何なる點に見出し之を如何に指導改善すべきやの方法に立脚されざりしを遺憾に思ひました。之について微力ながら私の所感を述べて見たいと思ひます。申すまでもなく皆様も御承知の如く、今や我國は世界の三大強國とはこりながら共存思想低級なること、まことに寒心に堪へない次第でありまして、我々日本人が世界の人達より排斥の聲も聞きつゝある事を少くとも御承知の事と思ひます。文化文化と叫びつゝも事實は思想の墮落しつゝあることを見逃すことは出来ません。近來公職者の不正事件の續出

勞働問題に、小作問題に、富めるも貧しきも生活の不安動搖に陥りつゝあるではありませんか。將來は以上述べました三生活の内何れの生活を主としてなしつゝ居られますか、内省して頂きたいと思ひます。畏れちうくも明治天皇は善惡を人の上には云ひながら身を省る人なかりけりと御詠み下さいまして我々に反省を促されました又

目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけりと自然の中に信仰生活を御教へ下さいました尙世の中を高きいやしき程々に身を盡すこそ務めなりけりと共存生活を知らしめ、各自の天職を完からしめん事を御教へになりました。それにつけても我々國民の務めはどうしても精神生活に依つて人格の向上をはかり、各自の天職を勵み、以て明治天皇の御遺訓に背かざらんよう心掛けねばなりません

ぬ。精神生活に尤も必要な事を自己を常に常に内省して生活改善に留意する世界人類の上に雄飛すべき我同胞よ、緊蹙一番ふるひ立たねばなるまい。然らば如何に欠陥を見出し如何に救済すべきやと云ふに、それは宗教教育の實施されざる教育の欠陥であるから、之を善導救済する道は只宗教に依るの外なしと斷言致します。宗教教育の布及こそ實に急務である。目今教育の欠陥はあまりに經濟的・科學的・教育的・知的教育にのみ走り、徳育教育に欠けて居ると思ひます。人生は知識の發達と共に感情思想の發達かともなはなければ到底完全なる人格を養成する事は不可能である。私共の生活を三分して見ますと動物的生活（種族保存戀愛問題）、經濟問題（勞働問題・小作問題を含む）、精神生活或は宗教生活靈的生活でありませんが、現代の人達は稍ともすると精神生活を没却して、經濟物質的生活及び動物的生活に没頭しつゝある有様であります。精神生活なくして我々はどうして萬物の靈長などと申されましよう、精神生活の上こそ我々の經濟問題も意義あり、價値ある事と

なるのであります。皆様事でありませぬ。佛教で申します廢惡修善こそ佛教の眞意であり、他人は免も角自ら實踐躬行精進して頂きたいと希望致します。精神生活の上こそ人生に眞善美の世界極めて樂しき境地が實現さるのであります。故に宗教教育に依つて人類共存生活の意義を徹底せしむる事が最も必要であると思ひます。本日後藤子爵の講演にて自治制の根本は人の世話にならぬよう人の御世話をするようにそして報ひを取らぬようと三つを教へて頂きましたが言ふは易く行ひ難いものであります。實行となると精神生活を基礎とせなくては到底なし得られませぬ。それにつけても私は宗教教育の必要を痛切に感ずるものでありまして教育當局者の方々の御一考を煩し布及實施に御盡力して頂きたいと希望して止ないのであります。

借金してゐる心もち（三）

中野 尅子

主「君なんかの様に、佛になんか救つて貰うものか俺が造た罪は俺が償つてゆく、又俺の借金は俺が返すのだ——と所謂自力を頼んでゐても、返へせない自分である事を知たときに付うする。それでも返へすんだと威張つて見ても實力の無い者は付うする事も出来ぬぢやないか、初めて自分の無力な事を訴へて詫びるより仕方があるまい、そして主人からの寛容を希ふのだ。それは決して甘へるのでも無けりや狡猾なやつて救を求めたのでもなし、却て素直な途だと私は信ずる。切羽詰てからの恥晒しであり願ひであるんだ。茲まで來なきや本當に他力に縋ると云ふのでも無い、又本當の念佛でもないのだ。それを「宗教なんかが何の要があるそんなものを信じなくとも立派に飯も咽喉へ這入るわ、佛なんか俺には要がない」と大言壯語して居れるのは、まだ自己自身や自己の生活に對して十分批判が足りないからだ、寧ろ私から

は悲惨に思ふよ、なにも物好きで神や佛を造て信じてゐる様な馬鹿はないからね、そこには確固たる理由があり整然たる理路がある。そりや達觀すれば善も惡も、愛も非愛も、親切不親切もないさけれどね親の意見に背けば良い氣持もせないさ、人の物を盗りや成功しても本心愉快ぢやあるまい。それぢや其慶事已めれば良いぢやないかと云ても後から後から誤聞化した氣も湧いて來る、自分の爲にはするが人の爲めには不親切になり勝ちだ。そしてそれが自分にも飽き足らないが付うともならぬ。自己本心の要求たる理想に比するに此現實の餘りに醜いのに氣が附いて來ると全く自己の不甲斐なさに泣きたくなる。泣いても元へ還らぬ、改らぬ自己の弱さを再び見出す時、心底から求哀懺悔の悲痛な聲を出さずには居れぬ。ただ此身動きもならぬドン底での泣聲が本當の念佛であり、救ひを求むる一念である。而し救て呉れる人があるやら無いやら、そんな事は知らぬがたゞ自然にこみ揚げて來る切なさである。是れで救はれるのやら宥されるのやらそんな事には係らず腹

大正十一年二月三日第三種郵便物認可大正十二年六月二十八日印刷納本大正十二年七月一日發行(每月一回)日發行(眞生第二卷第七號)